

セツ ぶん

NO.69



「いじめ」について人前で話す機会が増えた。学校設置者を訴えて損害賠償を請求するのが弁護士の仕事だというわけではない。いじめられた子どもにも安心・安全な学習環境を取り戻し、学習権を回復すること以上に、いじめ問題の解決はないという話をする。

有名な「四層構造」論に触れる際には、藤子不二雄の『ドラえもん』の登場人物になぞらえて、被害者Ⅱのび太、加害者Ⅱジャイアン、観衆Ⅱスネ夫、傍観者Ⅱしずかちゃん、という話を紹介する。子どもたちには、傍観者が勇気を持ち複数で行動する意義を説く。しかし、私たち大人が本当に考えなければならぬのは、四層構造を囲む五層目（保護者・教員）のあり方である。五層目の大人たちに、いじめの被害者はどうして相談してくれないのか。これとて、相談してくれないのではなく、実は、相談してくれないのだと思う。実際、「○○ちゃんにいじめられた」と言っただけで親や保育士にすがってくる幼児は多い。しかし、これからは自分で解決しなければいけないという自尊感情も、いじめについては時にマイナスに作用する。「自分たちで解決しなさい」と諭され、相談しても解決してくれなかったという経験は、大人へのあきらめや信頼喪失につながる。チクつて仕返しされるのはもつと怖い。大人が子どもを「いじめ」という暴力から徹底して守ることを実践すれば、子どもの信頼は急速に回復するはずである。

花島 伸行（センター運営委員）

ひと言 弁護士として「いじめ」を語る

目次

| | | |
|--|-------|----|
| ひと言 | 花島 伸行 | 1 |
| 特集 大村虔一さん（前県教育委員会教育委員長）に聞く 4年間で取り組んだこと考えたこと | | 2 |
| 被災地の今とこれから② 傷ついた地域・学校・子どもたちにかかわって | 菊池 英行 | 10 |
| 教室の報告 6年1組学級だより「きりりん」 | 佐々木大介 | 12 |
| 「子ども・若者会議」に参加して 被災地の復旧・復興は子どもたち・青年とともに | 高橋 正行 | 14 |
| 「戦後教育実践書を読む会」第2回の報告 いがったなあ～「案内人」ができて | 石田 裕子 | 16 |
| 報告「子どもの今と未来を考える」PART 1 今どきの「友だち、事情」 | 須藤 道子 | 18 |
| 高校入試を前にして | | 21 |
| わたしの出会った先生 1 ボクの先生 | 清岡 修 | 22 |
| 本の紹介 | 瀬成田 実 | 24 |
| センターの動き | | 24 |

特集 大村虔一さん（前県教育委員会教育委員長）に聞く

四年間で取り組んだこと考えたこと

48年に設置された教育委員会は、以来、ことあるたびに廃止解体・縮小論の渦に巻き込まれ、教育行政の安定性、中立性の確保という考え方はどこかに吹っ飛ばされていくようにすら思われます。一般にその仕事が伝わりにくく、廃止・縮小論にも無関心に見えます。そこで、前県教育委員長の大村虔一さんにお話を願いました。

10月24日午後、春日と清岡が仕事場の都市デザインワークスをお訪ねしお伺いしたものをまとめたものの報告です。お話の中に大村さんたちが取り組まれている子どもの冒険遊び場の興味あるお話も聞きました。その部分は後日あらためて紹介したいと思います。

（かすが）



「4年間のお仕事のいろいろなご苦労があったことと思います。はじめに、そのいくつかを話したいだけです。」

教育委員をお受けしようと思った訳から話させてください。僕は女房と一緒に、子どもの遊び場をつくる市民運動を30年程やってきました。常々、子どもの主体性、社会性、創造性などを育てる「遊び」について、教育の面からもっとしっかり取り組む必要があると話し合っていたんです。教育委員のお話があったとき、女房は癌の末期で、大病院の緩和ケアセンターでお世話になる段取りをしていた時期でしたので、お受けするのを実は迷いました。女房に話すと、「かねがね教育がもっとしっかりしなくてはいけないと言っていたんだから、やってみたら」と言うんです。本人は東京から一緒に活動してきた友人たちを病

床に呼び寄せ、最後の本「遊びの力」を仕上げようと苦戦していましたし、僕も今まで民間人として子どもの遊び場を通じて考えてきたことを、教育委員会にどう反映できるか挑戦してみようと決心したのです。

教育委員になつてみると、いろんなことがありました。教育委員会無用論者がいることは知っていましたが、県や市の非常勤職員に払われているお金が高すぎるとする裁判が行われていて、教育委員もその対象になっていました。どのぐらいの仕事量があるのかを確認する作業などがあり、教育委員会はそんな位置にあるんだなと改めて思いました。

高校共学化、プロセスを大事にしたかった

僕がいた4年間で大きかったのは、やはり高等学校の男女共学でしょう。各地で男女共学が進んできて、最後に残った高校の共学化の段になって、仙台一高の生徒が共学反対の街頭デモを行い、二女高や三女高も加わった。教育委員には連日のように手紙や署名簿が送られてくる。教育委員会としては、既定の

方針に基づいてこれまで各地で肅々と共学化を進めて来ていて、最後に残る仙台のナンバ一校だけがそれを免れることはできないというのが委員の一般的な見解だった。しかし、共学は既定方針ということで、丁寧に生徒やPTAの理解を得つつ進めなかつたため、土壇場で生徒が騒ぐ状況は問題だと思った。民主主義ではちゃんと当事者の意見を聞くべきであるが、生徒や保護者からの手紙には、なんとか共学にしないで欲しいという訴えに混じって、共学に批判的な教員の移動や生徒会役員人事への学校の介入などを批難する内容が多かつたのです。そこで、教育委員会として時間をかけて検討することにしたのですが、議会が騒ぎだした。既に決まっていたことなのに、今更何だという訳だ。

僕自身は共学そのものには反対ではありません。これまでのシステムを新たなシステムに移行する時に、当事者たちの話し合いの中で、その意見を尊重し反映するプロセスが大切だともうのです。それを安易に扱ってきたことが問題なのであり、生徒には理不尽と映っているのだ。当時僕の在籍していた地域振興センターにも生徒たちが何度かやってきた。市長も文書を持ってやってきて、後に問題視された。当然、共学化を推進する側の方も現れて、意見を述べた。一方に偏することなく、双方の空いている時間には申し出があれば誰にでもお会いすることに決めました。

もともと高校の男女共学を進めようとした頃の、最初の県民を説得している理由が大雑把で、既成事実をつくって押し切ろうとした政策だったように見えます。それが混乱を招いた原因となつたのではないかと思うので、教育委員会でもともに議論した訳です。いろんな人から聞くと、それぞれ思ったことをこんなに率直に話し合う委員会はこれまでなかつたというんです。いつも必ず時間がのびるんですね。主題に對しみなさん一言ありますから。教育委員会の本来の姿は、いわゆる教育の専門家ではないが、教育に熱い思いを持っている地域の人たちが自

分の視点から意見を述べ、地域の子弟の教育をどうつくるかをディスカッションすることから始まると思っていましたので、賛成も反対もはつきり発言していただく。そのため、記録を読むと混乱しているように見える部分もあるかもしれないけど、何故そうするのか自分たちなりに納得して決めてきたような気がします。

期待される役割を果たすために

教育委員会の仕事のやり方を変えることも、結果的にはうまくできなかったけれど、大きい仕事でした。教育委員会はお存知のように教育長と5人の委員で構成されています。人選はおそらく委員会事務局や教育長、知事などの間で行われ、議会の了承を得て決定されます。人選には、年齢、性別、地域、職域、教職員やPTA経験などを考慮して、総合的に行われるようです。任期は4年で、再任がなければ毎年一人ずつ新委員が登場します。この方法で、事業の継続性を尊重しながら、県の教育行政、とりわけ変革を求められている領域の課題解決を図るのは難しいことだと思いました。委員をバランスよく選定しても、視点の幅には限度がありますから、現場の先生や、子どもが学校に通っている父母、地域の人々、市町村の教育委員たちから直接話を聞くことが不可欠だと思えました。事務局内部でつくった資料にイエス、ノーと言うだけでは、教育委員に期待されている役割を果たせないと思いました。任期中にそうした交流の機会を増やす努力をしましたが、まだまだ不十分の状況です。それに加えて、教育委員会の重層構造の問題があります。県と市町村それぞれに教育委員会があるのです。県は教員をどこに配置するかや、その財政的な措置を分担しているのですが、実際にその地域でどういう教育をするかについては、県も県としている訳です。古い体質だと、県が方針を掲げて市町村がそれに基づいて実践するんだらうけれど、今は、各市町村の置かれて

いる事情などから自分たちの必要とする教育を考え、それを実践することが求められていると思います。その意味からもその交流はとても重要なことだと思えます。

入試―一人ひとりにあった教育を

毎年取り上げられる入試も大きい問題でした。僕には、大学の先生をした体験から、学生の就職活動や入社数年で退社する実態を見てきて、入試の仕組みが、いい高校や大学に合格させることに偏っているように見えたのです。本当は、一人の人が自分の人生を選びとっていくプロセスで、いくつかのチェックポイントで、本人の選択はもとより、親や先生や社会が、その人にどんな方向が合っているかアドバイスするシステムだと思うのです。能力差をチェックし選別するというより、マッチングだろうと思うんです。少子化のなかで、わずかな人手で、地域や国の文化、経済を担ってもらうために、全ての人にそれぞれ適切な社会人としての自覚や技術を教育し、地域を支え、持続可能な環境をつくり出すことが求められています。そんな時に、20世紀の人口倍増社会のシステムを踏襲していいのだろうかという疑問がありました。

フィンランドでは学校生活で落第しても社会的に恥ずかしいことでなく、その課程で習得すべきことを、少し遅れていいから確かに身につけることが求められるといいます。大学に入学したけれど、中学や高校で学んだはずのことが欠落していて、大学教育に支障を来す昨今の日本の状態と比較して考えさせられてしまいます。障害児の教育を語るとき用いられる「一人ひとりにあった教育」は、少子化時代では全ての子どもにも求められていると思われず。そのとき、上の学校に進む時の選択の方法や仕事を探すマッチングの方法は、本当はもっと大切なことだと思えます。教育委員の方々と話し合いましたが大切な面の業務とかけ離れ過ぎていて、事務局職員の理解は得られず終いでした。繰り返しになりますが、人口が増えるなかで、各

分野の秀でた人材を選び出して高度な教育を与えて国を豊かにする従来の発想は、人口減少社会ではそのままでは機能しなくなりつつある。少ない人口の中で、優れた人材を見いだす方法を探すことも重要ですが、より一般的な社会人として地域を支え、その持続に生き甲斐を感じる人をどう育てるかが、従来に増して重要になってくると思います。わが国では教育により子どもに能力をつけ、他人の迷惑にならずに食べていけるようにすること。できれば、豊かで幸せな人生を確保できるように、という親の願いと、英才を育て国力を高めようとする国の願いが重なって日本の教育観が形成され、教育熱心な国に数えられてきたと思います。一方、人口の少ない国では、その子が食べていけるといっただけでなく、一人ひとりその子が自分のできる仕事を見つけ、しっかりと働いて社会が維持できるように育てる。極端に言うと、一生懸命働いて、地域や国が成り立つよう税金を払い、社会活動をしてもらう人を育てる。それが地域社会や国を豊かにする原動力となると考えてのことでしょう。一人ひとりに寄り添う教育の中で見いだされる本人に合った、長く続けられる仕事の確立が前提となり、くらしの持続を求める社会の願いが教育観に反映されているのではないかと思います。

子どもの遊びの位置づけを

最初に話が出た子ども遊びは、子どもの頃に遊びを通して身につけるこまごました身体能力、指先や手の動きと連動する脳の発達、興味あることを追い求めて体得することを成し遂げる主体的行動姿勢や創造性、友人との交流や切磋琢磨で育つ社会性など、学校教育の場では難しい、興味ある体験の機会を与えてくれます。遊びは学校での教育を補完する有意義なものとして、県の教育の構想に位置づけたと思います。事務局員への特別講義なども行いましたが、残念ながら大きく受け入れられることにはなりません。遊び場のことについては、別途お話ししたいと思います。

―全県一区はどうでしたか？

高校の全県一区の議論は僕の就任以前に既に決定していて、具体的を実施する段階でした。方針は決定されているものの教職員からの見直しの請願などがあり、教育委員会にはその対応が求められました。これはもともと、子どもの学力や将来希望する職業に向けて、最適な学校を選べることを目的にしています。希望の学校に入学するために、母子が家族と別居し、転居した形をとるなどの不自然な事態は回避できるでしょう。しかし現実には運用しようとするれば、取り組むべき課題を抱えていることは事実だと思います。海外でも人口密度の低い地域で、人口密度の高い都市エリアの学校を自由に選べるように配慮し、家庭からの一般的な通学距離を超えて、学校を選べる例は少なくないようです。しかしそのためには、われわれ教育委員会の仕事の領域を超える総合的な施策がとられているように思っています。

高校の頃から自由に自分の生きたい道を選択できるようなするために、例えば通学のための交通手段の充実が必要です。それぞれの学校への通学圏を拡大したりその利便性を増す必要があります。しかし現実にはマイカーの普及で公共交通は至る所で廃止されたり、便数が減ったりしているのが現状です。通学が叶わない遠距離であれば、寄宿舎を充実させることで対応できるかもしれません。教育的配慮のある舎監がいて、クラブ活動のスポーツなどに打ち込むことができれば、本人にとつては、良い友人を見つける機会も増え、高校時代の良い体験となる可能性があります。しかしそうした寄宿舎を教育の一環として維持することは、公立高校の現状では難しいことです。将来的には優秀な人材確保のために、就職先となる会社や出身自治体にかかわるNPOが寄宿舎の運営や支援をすることが可能かもしれません。こうしたことへの提言は教育委員会の業務を超えて

おり、知事部局や、民間との連携が不可欠になります。できれば、地域と保護者が協力し、地域社会に置ける教育の課題として、現状を変える働きかけが必要だと思えます。

―3・11後に、私たち被災校の聞き取りに今でも歩いているんです。2年目になってくると統廃合の話がどんどん出てきています。統廃合が進んでくれば被災とは関係なしに今後ずっと通学バスで子どもが運ばれるということになるんでしょうが、それで本当に子ども時代いいのかという気がします。

そうですね。津波の影響を受けた海岸付近では、減少した人口の回復には相当時間がかかりそうですし、学校の運営は難しい問題がいろいろ出てくると思います。しかしこれには震災前からいろんな問題がありました。例えば限界集落だとか、そこまではいなくても広いエリアに住宅が分散しているところでは、群れて遊べる子どもがいなくて、親が自動車で子どもを連れて集まるようなことをしない限り、仲間がつかれない状況になっていく。かつては家が多少離れていても、農作業や屋根葺き、冠婚葬祭などでコミュニティが維持されていても、子どもの数が多かったことから、子どもの遊び集団が形成でき、地域の遊びの文化を伝えていた。それがすっかり失われてしまった。

明治時代に、村の中心に学校を設けると、少し遠い人もいるけれども、当時はだいたい歩ける距離の範囲に多くの人が住んでいて、コミュニティと切っても切れない学校がつくられた。おそらく当時の村落面積や人口規模との関連で、学校のシステムが生まれたと思います。その後、日本の人口急増、高度経済成長期の都市部の成長と農村部の衰退などを経て今日に至る訳ですが、自動車の普及による歩行慣習の衰退や少子化の影響も加わって、地域と学校の関係がアンバランスになっていくんです。スクールバスで集めた学校では、学校とコミュニティの関係がもつと薄れてしまう。子どもの徒歩の距離にある小さな学校を実現するには、運営上の問題が大きくなる。21世紀は人口が半減すると予測されますから、もつと本質的な検討が必要と

なるはず。小さい学校は子どもの切磋琢磨がなく教育上好ましくないとする意見、学校間の競争を軸に盛んになった日本のスポーツを考慮すると一定の学校規模が欲しいとする意見があるが、海外には小さい学校や学校とは別個の地域スポーツクラブなどの例もあり、子どもが今後更に減少する事態を考えれば、地域の実情をもとに抜本的検討を行うべきだろう。

現実に即した夢を描くこと

僕は都市デザイン、まちづくり等を専門領域としていて、いろんな市や町の総合計画策定委員などを務めてきました。中には必ず「教育」の分野があり、市町村教育委員会事務局による計画があるわけです。たいてい「歴史と伝統ある豊かな土地で、生き生きとした人間を育てる」のような文が載ってる訳です。一方「人口統計」の項にはここ10年の人口推移が載っていて、将来の子どもの数の減少は歴然としている。「ここ2、3年で学校の統廃合が問題化する中で、こんな計画でいいのか」といった質問をする訳ですが、多くは問題をできるだけ先送りにして、伏せておきたい意向なんです。もつとも2、30年前の計画書では、これまでの統計では人口減少が著しいにもかかわらず、計画策定後の市の将来人口推計では、一転増加に転じるような記載がまかり通っていたのだから、いく分、ましになったというべきかもしれません。しかし計画としては、子どもの数が減り、学校統合が必要となった場合、何を原則として統合を進めるのか。あるいは地域コミュニティとの関係を重視して可能な限り学校の数を減らさない方針を貫けば、どんな計画が描け、どんな問題が生じるのか、などといった比較代替案をつくって、時間をかけて市民に考えてもらう必要があるのではないかと思います。

ある合併市の総合計画の時に、「せっかくな新しい市をつくり、その夢を描こうとする計画に、これからだんだん暗くなるなんてことは書けないし、書きたくない。」という委員の発言があり、教育の項は具体的な計画を入れず、建前を書いた訳です。しかし

予測される具体的な事象は数年後に顕在化し、市民はそんなはずではなかったと怒って、それぞれの地区などの利益誘導合戦に進展する訳です。そうではなくて、子どもの数が減っても、教育の質を守るために何ができるか、地区で協力してできることがあるか、跡地が発生した場合地区の活性化のためにどう活用するか、通学の足を地域の高齢者と共有するコミュニティ維持と関連づけられないかなど、現実に即した夢を描くことが大切だと思っています。

—私たちの研究センターも課題をいくつか持っていますが、その一つとして「地域と学校」があります。特に震災後、こういう事情ではやむを得ない統廃合だとされる。簡単にそれでいいのかという疑問はもちますが。

国の制度上必然的にそうなることが多い訳で、特区でもつくれない限り、現状では地域からの発想でできることは少ないと思います。しかし「地域と学校」を主題とし、県内の現状、歴史の変遷、評価されている地域の取組みなどを調べてみれば、いろんな発見があるはず。今、教育委員会はあるルールで校長や教職員の移動を行っていますから、その短い期間で本当に地域の人になるのは難しい面があると思います。昔は相当長く地域におられた先生もあつたし、海外事例と比較しても面白いでしょう。また、先生の住居も多くは都市部にあり、マイカー通勤が普通だと、地域の課題が見えにくいでしょうね。

—50年代に『村を育てる学力』という本が出たんですね。それが今は、村を育てるんじゃないかって村を捨てる学力になつていると言われます。

その通りだと思いますね。子どもは自分を愛おしみ育ててくれた地域、



故郷に愛着を持つのだろうと思います。僕もそうで、東京で好きな仕事をしていて、台原の林で遊び呆けていた頃の楽しい体験を忘れられず、娘や息子にもそんな思い出を残してやりたくて、冒険遊び場をつくるはめになったんです。仙台に戻ったのは母校から呼ばれたのが直接の原因だけど、一方では自分を育ててくれた所への特別な思いがあったのでしょう。東京では仕事の上で多くの友人ができ、世田谷では遊び場づくりを通して多くの仲間ができて、ことを企てて実現する環境が少しづつできてきていたと思います。大学の定年を迎えたとき、東京に戻るよりも仙台に残ることを選んだのは、こちらの方にやらなければならぬ仕事が多く残っているように思えたからです。子どもの頃の、地域とのつながりを意識させる友人との遊びや社会体験が、子どもと地域の絆を強くするのだと思います。

—最初、教育はなにもからも独立してということスタートしたはずですが、それはまずいという人たちも出ています。実際、相当縦の関係が強固になつてしまつていないように思いますか。

「教育がなにもからも独立する」という言葉は、時代の政治や特定の宗派などの影響で、次代を受け継ぐ若者に歪んだ遺産を手渡すことのないよう戒めた言葉だろうと思います。制度上も一般の行政部局のように知事のもとになく教育委員長を置くことや、議会に諮らず教育委員会で審議する方式はその姿勢を表現しています。また教育委員は一般人（レイマン）で、教育委員会は所謂レイマンコントロールのもとにおかれていますが、必ずしもその成果が見える訳ではありません。現実の問題として、教育予算は別途独立した財源があるわけでなく、他の予算と一緒に議会で決定され、あまり独立感のある自由な運用ができる状況とは言えないと思います。

一方、前にも話しましたが、全県一区を活かした地域の教育力向上には、通学関連のバス輸送や寄宿舎整備など総合的な施策の推進が求められます。これを一つの省庁の施策体系と予算で実行することは難しく、他部局との連携協力が必要となりますが、こ

れがなかなか難しいことです。それぞれの制度が一定の枠の中で運用されるからで、例えば認定保育園のような幼児教育と保育と子育て支援を総合化する施策は、素人目線からはうまい形で早くスタートして欲しいと期待するものの、なかなか手間取つているように見えます。

1979年の国際児童年に、その4年前から近所で土地を借用して遊び場を運営してきたNPOと世田谷区の協働事業で「羽根木プレーパーク」をつくった経験からいえば、その協働体制づくりにはなかなか知恵がいる。日常の運営は、地域住民による実行委員会が行う。予算は区の児童課が持ち、場所は公園課の管理下にある。これに長年ジュニアリーダーを育ててきた社会教育課と、ボランティア活動推進を図る地域福祉課を巻き込んで5者で運営委員会を組織する。その合議体を遊び場の最高決定機関に位置づけた運営で、よちよち歩きでのスタートでした。僕らの関心事だった学校の巻き込みは不調に終わりました。子どもたちへの大量の広報も、学校は無関係ということで、二人一組の実行委員が下校時に学校の校門前でチラシを配りました。最近の文科省の放課後児童クラブなども、地域NPOなどとの連携がうまくいけば面白い活動になると思いますが、排他的独立路線では子どもに人気のある居場所にはなれないでしょう。

—教育委員会の役割を考えたときに第三者機関がいろいろあると思うんですが、そこから答申が上がってくると教育委員会はその答申を承認するだけになってはいないか、議論があまりないのではないかとと思うのですが。

第三者機関による答申は、ただ承認するだけでなく、教育委員会として議論して、意見を反映することが重要だと思つています。



僕としてはまだまだ不十分だとは思っていますが、審議がまとまる以前に、そのとりまとめをしている事務局担当者、教育委員としての意見を提出しています。第三者機関と教育委員会の検討は審議内容によって相違がありますが、計画策定など複雑かつ総合的なものは大体次のようなプロセスを踏みます。先ず第三者機関の設置に際して、事務局の委員構成の案が教育委員会に諮られます。次いで全体の骨子が見えてきた段階で中間報告があります。更に一応のとりまとめが済み、全体像が描かれた段階で、事務局に対して教育委員としての意見を申し上げ、必要に応じて文書にしています。最後に、答申されたものを審議し、意見を付加し、承認することになります。

僕は審議会を形成する前に、取り上げる主題が、現状どのように運用されていて、事務局または教育委員会でどこに課題があると考えているかを整理し、審議会に提示することが大切だと考え提案してきましたが、実現しませんでした。従来と代り映えしない理念系の文言の多い答申になる原因はそこにあると思います。所謂PDCAサイクルのなかで、計画の運用を通して見えてくる多くの課題を日常的に整理し、積み重ねていけるはずです。また、審議会の早い時期に、審議委員と教育委員の意見交換をしたいと提案してきましたが、残念ながらこれも日程などの理由で実現せずには終わりました。最も大きい問題と考えるのは、審議会の意向を汲んで答申をまとめるワーキングチームの編成です。普通、事務局担当者がその役割を担ってきました。県の教育の課題などを意見聴取しやすい形に取りまとめて提出し、審議委員の発言を採集しつつ提言等の骨格を構築する作業は、かなり専門的技術を要します。担当者の問題意識レベルによって、成果が大きく変わるようになります。いい答申をまとめるために作業者の養成が大きい課題になると思います。

― 定例は月1回になりますか。

定例の協議会は月1回でした。事務局の関わっている作業は多

岐に渡りまずから、委員会に提出される議事も多くなります。事務的にこなせる議事はいいのですが、討論が必要で各委員の発言を求めたいような場合には時間が足りなくなり、6時を回る必要があります。僕個人としては、1回にこだわらず、必要な回数開けばいいと思ったりしましたが、他の委員の仕事の忙しさを伺うと、現実的には無理のようです。回数を増やすには、それが可能な委員の人選を行う必要があります。また、定例の委員会をスムーズに進めるために、議題となる主題について予め知識を持ち、自分の意見を整理しておく必要がある場合も出てきます。とりわけ委員1年目の時は、主題の全体像や背景が見えず、的確な判断ができず悩むことがあります。そのために、関連するかつての委員会議事録を取りよせて読んだり、委員個人又はみんなで事務局からレクチャーを受け、十分質問の機会を設けることもあります。委員会開催の背後にそれぞれの委員の時間外の実力があるので

― 新聞で泉佐野市が学力テストの学校の順位を公表、教育委員会は反対をしたんだけれども、市長がそのまま通したことを読みました。何となく今の空気ですと、このような市長の例が出てくる流れにあるような気がするんですね。

ありますね。教育委員会がしつかりしなくてはいけないと思いますよ。子どものやる気を引き出す教育実践に積極的に取り組むのは当然として、教育委員会は事務方とばかり話していいいで、社会に対してしつかり発言していく仕掛けが要るだろうと思えますね。

― 最後に、4年間教育委員会の仕事をなさって、保護者に、学校に、教師に、いろいろお考えになられたことがおありと思います。今後我々が一緒に考えて行くためにもそれらについてお話しただけですか。

先ず、学校や先生を信頼していない保護者が増えてくるように思えて心配ですね。子どもに何かあると学校や先生の所為にして批判したり、あるいは攻撃を加える。社会全般の責任転嫁風潮を

背景とした社会現象とも見えますし、社会性を欠如した大人の急増による現象かも知れません。昔のことを考えれば、家庭や地域あるいは遊び仲間の子ども社会が、一人前として生きていくための姿勢、知識、技術などを教え、あるいは学び取らせたりしていたわけですね。学校制度ができ、教育技術が発達して、その多くが学校で合理的に学べるようになった訳ですが、今でも、家庭や地域や子ども社会の教育力に委ねた方が効果的、あるいは委ねざるを得ないものが少なからず残っていると思うんです。なにもかも学校に任せっぱなしにするんじゃない、家庭も地域も子ども社会も協力し合って、子どもを育てるパートナーシップを組むことが大切なんだろうと思うんです。その協働システムの中で子どもは教育を受ける。それをつなぐものは相互の信頼なのではないでしょうか。

市町村教育委員会との交流会議で、ある町の委員さんから、自分の町の学力が低迷しているのは、優秀な教員が送り込まれないためだとする発言があつて、本当にそう信じているのかと驚いたことがあります。努力しても地域の学力テストの点数が上がらないことへの言い訳なら、こんな席で行われる筈もないからです。先生方も当然家庭を持ちますから、その生活利便や子どもの教育などのために都市部への配属を希望する先生が多いことは事実でしょう。しかし僕の4年間の体験では、県の教育委員会が能力のある教員を都市部に留めるような偏った人事を行っている気配は全く感じられませんでした。しかし、たとえ優秀な教員が送り込まれても、地域や親に学力向上に学校とともに取り組もうとする姿勢がなく、一人ではどうにもならないと教員がやる気を失った場合には、結果としてやる気のない教員が送り込まれたことになります。それを防ぐのは、基本的には学校全体での取組みや教員相互の協力体制でしょう。おそらく教員のやる気を引き出す学校づくりがその町の当面の課題なのじゃないかと思つたのです。

たとえ都市部に住みたい教員が多いとしても、田舎の環境や自然とふれあう生活に魅力を感じる教員もいる筈です。過疎傾向の

町で、子連れで都会暮らしから逃れ、農業などに励む家族に会うことが多くなりました。同様のことが教員にあつてもおかしくないからです。そうした教員が行きたくなる理想的な田舎町や田舎の学校がつかれないものでしょうか。TVでは連日、魅力的な田舎の暮しや食べ物を紹介する番組が流れています。その多くには個性的で活動的な個人やグループがいて、田舎の思いがけない魅力を掘り起こし、自らエンジョイしています。こうした活動は地域にかかわって積極的に生きるモデルとして強い教育力をもっています。積極的な町起しの活動に魅力を感じ、それと連携して地域に根ざす学校づくりをしたい教員の集まる、持続可能な田舎の学校なんて夢を、地域の教育委員会が描くことはできないものだろうかと思えます。

学校や教育委員会の、社会と向き合う姿勢には気がかりなところがあります。例えば、イジメ問題が発生したときの対応は端から見てもイライラします。調査中などの理由でさんざん待たされた後に、不十分なイジメ対策の取組みを隠蔽するためか、管理責任問題の発生に気を使い誰かを庇っているのか、などと勘ぐりたくなるような奥歯にももの詰まったような発言が多いのです。危機管理マニュアルに沿って行動し、速やかに客観的な情報を提供して、さらに「より詳細な〇〇調査を継続していて、その結果は何日に発表の予定」などとする報道はできないものでしょうか。そんな対応によって、社会の学校や教育委員会へのイメージが変わり、信頼回復にもつながると思つたのです。

—お約束の時間をすっかりオーバーしてしまいました。
本日はどうもありがとうございました。

傷ついた

地域・学校・子どもたちにかかわって

―震災後1年半の石巻の現況をふまえて―

菊池 英行

1 東日本大震災と自分

3・11東日本大震災は、故郷石巻を破壊した。情報から途絶され、何が起きているかわからない状況で、自分の足で歩き自分の目で確認する以外に方法はなかった。翌日から親族や知人の安否を求めて歩き回った。その時、あまりにも変わり果てた故郷に愕然とし、「石巻はもう終わりだ」と率直に感じた。

最初の頃は生きることについて一杯で夢中だったが、時間が経つにつれ自分は何をすべきなのか葛藤が起った。旧市街地のほとんどが津波被害を受けた中で自分が住む場所が奇跡的に水の被害を免れたことが当時は負い目となり、なおのこと精神的に負担となった。

4月半ば、災対連（全国災害対策連絡会）の立ち上げに加わり、9月末まで活動することになる。全国からのボランティアを作業現場まで送り迎え

する折りに故郷の被害状況を説明していたことが、被災地を案内する活動となり、現在も続いている。

1年半が過ぎ、被害を物語る建造物や瓦礫が片付けられ、新たに被災地を訪れる人には震災当時の状況を想像することは難しくなっている。また、被災地から離れるほど関心が薄れ全国の意識の変化も否めない。被災地で最も恐れる「風化」という心配される状況が急速に進んでいる。

2 震災によって広がる格差

この震災では多くの尊い人命が失われた。家屋を含めた財産のすべて、また、つむぎあつてきた家族・友人・地域を失うなど、奪われたものは大きくすぎる。被災地では「復興 すべて様々な努力がなされている。コミュニティの再生も一つである。しかし現状は非常に厳しい。特に、石巻のように広域的な被害を受けた都市での場合はなお

さらである。

人口16万人の宮城県第二の都市石巻は、震災で死者・行方不明者4000人、2万8千世帯の家屋が全壊、大規模半壊を含めると約4万戸（岩手県にも匹敵する被害）になる。住む家を失った人は仮設住宅にぐらしている。現在石巻市は、約7000戸の仮設に、コミュニティをバラバラにされた（抽選で入居）人々が入り交じって生活している。

自治会の再生を進めているが簡単ではない。島や浜に位置していた小さな地区が集団で高台移転を決めるが、市街地の場合は非常に複雑で困難を極める。被災した地域をどうするか（上からの）復興計画で居住区域が示されたが、単純な線引きで明暗を分けることになり、共同し難い事実となっている。さらには、家族を失った人、家を失った人、どこに居住していたかということ、仮設住宅での生活の問題、雇用の状況、債務の問題など、それぞれが置かれた状況は複雑多岐にわたっている。

置かれた状況によって格差の拡大は顕著になり、個人の力では補いきれない現実と直面している。

いま、これらのことが子どもたちに大きな影響を与えている。「貧困と格差」の問題が、被災地域においてはこれまであった格差を押し広げることが強く懸念する。勉学を継続できない、進路を変更せざるを得ないなど、弱い立場の人間を蹴落とすように進行している。震災で背負ったものを個人の責任として転嫁されるのはおかしいことである。いま、子ども・学校・教育の置かれた状況を、これまで以上に大切に支援してほしい。

3 教師としてスタートの場 そして原点

大学紛争落ちこぼれの新米教師が教師らしくさせてもらった初任校が、宮城県登米高等学校豊里分校であった。初めての授業は、屈強な男子生徒たちに肩車されて学校中を引き回されて終わった。とんでもない学校に來たと思ひ挫折感を味わうが、生徒たちの置かれた状況と気持ちがわかるにつれて自分の気持ちも変化した。

「勉強しないと豊里分校にしか入れない」と小さいときから言われ続け、その学校でスタートせざる得ない高校生活。序列化された中で分校にしか入れなかったことによる劣等意識。そして学校は、校庭がない、体育館がない、あるのは支え棒がしてある老朽化した木造2階建て校舎のみという、県立高校とは名ばかりの教育環境であった。劣悪な教育現場で生徒たちは極端に傷ついていた。

この学校は、1978年6月12日に発生した宮城県沖地震によって、校舎に壊滅的な被害を受けた。この後、この学校の生徒と教員は校舎のない状態での生活を強いられる。毎日毎日、日替わりで町内を自転車で行き回り、借りられる場所を見つけては授業をした。当然、教職員組合としても運動したが、県教育委員会は登米高等学校豊里分校の募集停止を発表する。すなわち3年後の廃校を決定する。PTA・同窓会と教職員が存続運動を行い様々な手立てを打つも、最終的には押し切られるかたちとなった。地震によって校舎を失った生徒と教職員には、廃校までの数年間、どこからの支援もなく厳しい生活が続いた。

校舎の新築を求めたが結局はプレハブ校舎とな

り、さらには中学校新築のため町から移転を強いられ（借用地のため）、最終的には小学校の校庭の片隅にプレハブ1棟を建ててもらって生徒10人、教師3人で最後の1年間を過ごした。

私は、豊里分校閉校に至る9年間の中で子どもたちから多くのことを学んだ。わかっていた。人並みの人間として扱ってもらいたい。多くのことを知りたい。勉強は嫌いだけど、賢くなりたい。人並みの教育を受けたい。

東日本大震災から1ヶ月目、海から200mにある市立の女子高校を訪れたとき、壊滅的な被害を受けた校舎内で数人の卒業生に会った。「在学していたときには学校は嫌いだ」と泥だらけの校長室を泣きながら雑巾がけしていた。

このとき、宮城県沖地震での記憶がよみがえった。豊里分校が解体される日、大型重機が校舎を壊し始めたとき、ある女子生徒が「学校を壊すな！」と重機に石を投げつけていた。学校に真面目に登校する生徒ではなかったので意外だった。同じ思いを感じた。

昨年からは多くの方々被災地の案内をしてきた。3回程だが50〜60人の高校生を案内する機会があった。被災地を案内した後には地元の高中生との交流をしてもらっている。前述した海から200mの女子高校の生徒は心にしみていた被災体験を同年代の相手に涙ながらに伝え、それに対して真剣に向き合う姿に感動を覚えた。若者たちに被災地を是非見てほしい。

4 今後に願うこと

石巻市内の19の小中学校・高校が震災の被害で

学校が使用不能に陥っている。高校は学年ごとに分散しての生活、小中学校は他校敷地内に仮校舎を設営したり、他校の校舎を間借りしたりしての不便な学校生活を強いられている。また、専科の多い中学校では冷房のないプレハブ校舎・特別教室での過酷な生活が強いられている。

今後学校がどうなるのかが大問題となっている。被災した学校は、同じ場所に建設する場合は2年後、他の場所に移転する場合は5年後に完成させる方針が出されている。

門脇小学校のように学区のほとんどが消失した場合、大川中学校のように、大川小学校の悲劇によって入学生が極端に減ってしまった場合など、尋常でない状況での問題もあるが、震災を機会に集約化・統合が加速することが心配される。

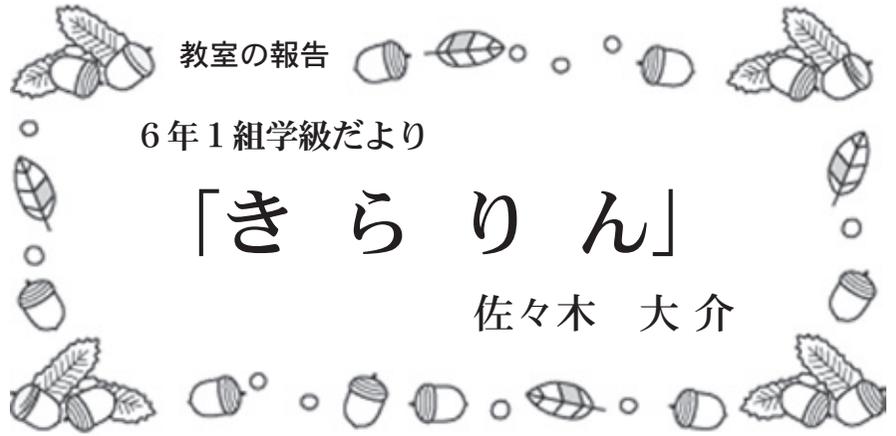
今回の震災では、石巻管内の小中学校の児童生徒204名（死者・不明者）の、尊い人命を失っている。生き残った児童生徒も多くの痛みを背負って生きることになる。

1年半すぎた現在、震災のことがフラッシュバックして涙する場面に何度も直面する。傷ついた被災地だからこそ子どもたちが大切にされる教育、温かい学校の存在が必要である。

被災地の子どもたちが幸せになれるような特別な配慮がなされるべきと考える。

（元高教組執行委員長

（編集部注：以上の文は、9月29日に行われた日本臨床教育学会第2回研究大会「特別課題研究」でお話した発表要旨です。）



教室の報告

6年1組学級だより

「きらりん」

佐々木 大介

No. 38 (2012.6.5)

「聞く」と「聴く」

「今日のめあては、話す人の方を見て話を聞くことです。」という班のめあてを最近よく聞きます。きつと話を聞くことが大切なこ

とであると考えているからそのようなめあてになるのでしょうか。

先週、「聞く」と「聴く」のちがいにについて話しました。「聞く」は、門のそばで耳をそばだてたことからできた漢字で「耳で音やことばを感じ取る」という意味があります。

「では同じ『聴く』でもこちらは、どんな違いがあるのでしょうか？」と、尋ねました。すつと手が拳がり、Aさんが『聴く』には心という漢字が入っています。」と発表しました。その通りです。「でも心だけではありません。他には何が入っていますか？」

「目も入っています。」「十も入っています。」「聴く」には、注意して耳にとめる。耳を傾けるという意味があります。相手に目を向け、(ちゃんと聴いているよ)という心(メッセージ)を伝える聞き方が「聴く」なのです。今、クラスでは「聴く」が課題です。もちろん授業では聴こうとする子がたくさんいます。でも先生の話だけ聴けばよいわけではありません。子どもたち同士の話合いや友達の発表、日直の話、昼の放送など、聴いているように思えない場面があります。司会の人の声がだんだん大きくなってくるのは、話をしている人の声がうるさくて聞こえないからです。ちょうどあと1週間て聞かせたいです。今週身につけさせたいことの一つです。

No. 85 (2012.9.27)

5月よりぐつとじょうずに

「先生、今日の歌は一人で歌うんですか?」「はい、そうです!」「おおっ! じゃあ、練習しなきゃ!」と、教室のあちこちで歌う声が響いてきます。昨日は『ふるさと』の歌のテストでした。初めて歌のテストをしたのは、5月でした。その頃は、「先生、一人じゃぜつたい無理です。ぜつたいですよ。」「じゃ、二人でもいいけど。でも、三人だと聞き取れないなあ。」と、一人で歌うことに抵抗があったことを思い出しました。「今回は一人だけど、どう?」と聞いてみると、「別にもう気にならない。」という答えが返ってきました。逆に、歌うことを楽しみにしているかのようにした。歌う声もやわらかく響くようになり、すごく上手くなったと感じました。しかも、堂々としています。歌うことに自信ができてきたのかもしれない。でも、全員で歌うときに比べると、表情がかたくなります。それは、当然だと思います。でも、一人一人が卒業式にソロで歌っていることをイメージして、リラックサして歌うことを目標にしているので、これからも、もつともつと鍛えていきます。

昨日の国語では、進んで発表が20人を超えました。授業参観で発表できないと話していたことを考えると、こちらもすごい伸びです。自分ができなかったことや苦手な

ことに対してどんどん挑戦し、「たいしたことなかったな」と思えるように乗りこえていってほしいと願っています。

No. 92 (2012・10・23)

思わず、うなづてしまいました

国語の下の教科書の扉には、『いのち』という詩がのっています。

1 いのちはなぜ命と書かないのか？

2 なぜこの詩が小学校最後の(国語の教科書の)先頭にあるのか？

この2つのことを考えさせました。みんな(ではないけれど)よく考えています。感心しました。思わずうなづてしまうほどです。

Sさん

1 私は漢字で「命」と書くとなんでかわからないけど、なにかに限られてしまうような気がします。でも、「なにかに限られているの？」と聞かれるとわかりません。でも、ひらがなで「いのち」と書くとなにかに限られず、すべてのものにいのちがあるという感じがします。全てのものに命があるわけじゃないじゃん」と他の人に言われても自信をもって「全てのものにいのちがある」と言えると感じました。

2 命の大切さについて、もっと知って

ほしいからじゃないかと思えます。中学校になるといじめが増えたり、いじめがひどくなったりします。ニュースでやっていたようにいじめのせいで自殺してしまう人もいます。でも、この詩を教科書にのせた人は、いじめのせいで自殺してしまうようにいのちをそまつにしてほしくないという思いでこの詩をのせたのかなあと思いました。

Kくん

1 ぼくが考えたことは、『命』と書く、人の命みたいで、『いのち』と書く、世の中にあるものが全部いのちがあるよということを書いてたんだと思います。そして、そのすべてのいのちに感謝しようということでした。

2 先生から聞いた話で、小学校を卒業して、一番いじめが多いといわれている中学生になって、みんなからたえいじめられていのちは大切にしようということ、そして、いじめる人にはならないようにしようということ、先頭にあるんだと思いました。

No. 111 (2012・11・11)

すばらしい気づきです！

社会の授業での気づいたことや考えたことに感心しています。1枚の絵から分かることを発表する中でこの絵が意味して

ることは何かを考える授業をしています。昨日の授業で活用したのが下の絵です。

「綱渡りをしているのは、ちゃんまげで着物だから日本を表している。」

「扇子をもつて余裕な表情をしているのは、日清戦争で勝ったからじゃない。」

「熊は、強い動物だから強大な国だ。寒い所に住むからロシアだと思う。」

「遠くに見える山が富士山だから、がけの間の綱の下は海なのでは？」

刀を2本差しているのは、清からの賠償金をたくさんもらって武器を作り、綱渡りは圧倒的にロシアの方が強いけど日本が挑戦している。表情は余裕だからロシアにも勝てると思っているとまとめたり、ここまで追求できたりすることがすばらしいです。もちろん、最初からこのような発言が出てきたわけではありません。最初は、『熊は北極かもしれない』という発言から深まってきました。積み重ねていくことが大事なのです。ほんの5分ちよつと5つ以上も気づいたことや考えたことをノートにまとめる子も増えていきます。しかも、昨日の授業では、「Nさんにちよつと似ているんですけど」というTさんの発言など、友達に付け足したり、関連づけて考えたりという発表が見られました。社会の授業が今一番おもしろく充実しています。

(仙台・八木山南小)



「子ども・若者会議」に参加して

被災地の復旧・復興は子どもたち・青年とともに

高橋 正行

1 はじめに

10月27・28日、盛岡市内を会場にワーカーズコープ主催「いま、『共同』が創る2012全国集会in東北」が開催された。27日は岩手県公会堂を会場に記念講演「農の力と、ともに生きる社会の構造」(星寛治・たかはた自然農法家、パネルディスカッション「新しい社会を共同でできよう」次世代に希望をつなぐ東北被災地からの挑戦)が行われた。

翌28日は分科会、「被災地発・市民主体のコミュニティ再生と新しいまちづくり」「福島から命と暮らしを考える」「東北の大地に根ざす新しい生き方・働き方」「子ども・若者会議」10年後の未来を描く……等々、岩手大学を会場に13分科会で『人間にとって本当の豊かさ、大切なことは何か』『真の復興とは何か』が議論された。

日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)は高度経済成長後の1971年「失業者・中高年齢者」の仕事づくりをめざす「事業団」として全国に誕生した。その後、広く社会連帯活動や国際連帯活動を行い、現在は「地域福祉事業所」づくりや生活保護受給者の自立・就労支援事業など幅広い活動を展開している。

第7分科会は「復興が10年、20年の長い時間を要するなかで、その地域を担っていくのは子どもや若者たち。こ

した、次代を担う当事者である子ども、若者たちが震災で何を感じ、どういう生き方とまちの将来を望み、復興の今と未来を描いていくか、主張を聞く。」をテーマに小学生2人、中学生2人、高校生3人がパネラーとして参加し話し合いが行われた。午後は6く7人のグループに分かれ、それぞれのグループで未来の町づくりワークショップが行われた。

2 子どもたちの発言から

- ・ いままでの意識や常識、考え方などを変え社会にどう貢献していくのかを考えることが大切。
- ・ 震災を経て一人ではできないことや、むずかしいことでも、仲間がいればのりきれると思うようになった。
- ・ ……家族や友達の大切さを改めて知ることができた。
- ・ 震災後、私の周りでは震災前にはあまり意識しなかった節電・節水・節約を心がけている。……この変化を良いものとして、これから被災地がより早く復興出来ることを願う。
- ・ これから生活していく中で大切だと思うことは、ちよつとした揺れでも怖がる子どもたちの恐怖心を取り除いてあげたり、震災で笑顔を無くした子どもたちの笑顔を取り戻してあげること。
- ・ 震災後、遊ぶ場が減ってしまった子どもたちに遊び



場を作つてあげたい。

・ 震災から学んだことは人と人のつながりの大切さ。将来は役場、小・中学校の先生など地域の人々の生活を支える職業に就きたい。

・ 震災を経て家族関係が変わつた。本当の意味で家族と向き合うようになった。

・ 危機的状態の中で学んだこと『何が大切なのかを見極め、余裕を持てる人間になること』。

3 震災から多くのことを学んだ子どもたち

小学生、中学生、高校生が分科会で語つてくれた言葉は貴重である。東日本大震災は町を押し流し、人々の生活を破壊した。そして原発事故は私たちの未来に癒しがたい傷跡を残し続けている。子どもたちは地震・津波を目の当たりにし、その後の現実を直視し、さまざまなことを感じ、考えた。

震災前は当たり前と思つていた水や電気やガスの大切さに気付かされた。

放射能汚染で好きな魚を食べることが出来ない現実から、自宅にも帰れなくなつている福島の人々の生活に思いを馳せた。

仮設住宅の不自由な生活と遊び場のない子どもたちのつらさに共感した。

避難所での人間のみにくさに直面した。原発事故から今後のエネルギー問題のあり方を考えた。

そして震災時の様々な経験から得た子どもたちの教訓の一つは『私たちが生きる上で最も大切なものは、お金でも便利な生活でもなく、人々のつながり（連帯）』である。

4 町づくりの原点は人々の暮らし

午後からのワークショップ「未来の自分の町を描こう」は、

私自身にとつても初めての経験であり、楽しく充実した時間となった。6つのグループに分かれての町づくりは、子ども、青年、若い人、経験豊かな人、と様々な意見・要望を交えて大いに盛り上がった。

各グループとも様々なコンセプトを持ちながらも出来上がった町には共通点があった。

① 安全な食品で自給自足できる町
② 風力、太陽、波力、地熱、発酵と安全なエネルギーの供給できる町

③ 自然豊かな町

④ みんなが仲良くなれる町

⑤ 安全・安心で住みやすい町

⑥ 産業の中心は農林水産業

⑦ 津波対策が出来ている町（ひよっこりひょうたん島もある）

⑧ 昼は子ども、夜は大人も楽しめる町

国の震災復興計画はなぜか財界中心のコンクリートの町、この集会に参加した私たちがつくつた町は人々が仲良く暮らせる緑り豊かな町であった。

5 復旧・復興計画に子どもたち・青年の視点を

震災からの復旧・復興への道のりは遠く険しい、地域の復旧・復興を担っていくのは子どもたちや青年である。国の案も含め新たな町づくりが様々な提案され、あるいは暗礁に乗り上げていく。今こそ子どもや青年たちの声に耳を傾けた町づくりが求められている。子どもや老人にやさしい町は人間にやさしい、子どもたちの成長を大切にすることは希望が生まれる。分科会に参加し、改めて未来を見つめる若者の視点の確かさに驚かされた。

（宮城県高等学校・障害児学校 教職員組合執行委員長）



いがつたなあ

「案内人」ができて

石田裕子



あの日も、ばたばたとした日で疲れていたのです。子どもたちを帰し、教室で仕事をしていると、「石田せんせい、電話です。」との声。私の教室は、職員室から一番遠い2階のはじっこ。でも、今年度から勤め始めた今の学校は校内放送は必要ないんです。生の声で私の教室まで職員室の先生の呼び声が聞こえるのです。

研究センターからでした。話は、連続講座の「戦後教育実践書を読む会」で社会科教育に関する本の「案内人」を私にやってほしいということでした。（でも、忙しいし、責任持てないし……、しばらくレジメとかも書いてないし……無理無理。）と話を聞きながら思ったのですが、つい「はい、分かりました」と言ってしまうのでした。数日後には本のコピーが郵送されてきました。開封して、ペラペラとめくり、（今、忙しいからなあ……。ま、夏休みにでも読めばいいか。）と本のコピーを封筒に入れ機の脇に置きっぱなしにしていました。

秋風が吹く頃、一枚のハガキが私の手元にきま

した。それは、春日先生からでした。（んだ、もうそんな時期か……やばい！）正直、この時期になってもレジメは出来上がっていないかったのです。「何かありましたら相談してください」と書いてあっても、とても相談できるレベルではない私。お返事をするためにも、レジメに取り組まなければ……。でもなんだか疲れていて、本のコピーをじっくり読む気にもなれませんでした。しかし、春日先生との約束を守るために、本のコピーと向き合いました。

すると、「あ、これ、本多公栄先生のところで読んだ本だ。社会科教育演習の先輩が『社会科教育と生活綴方』という卒論に取り組んでいる中で、相川実践を中心に研究して、相川実践を知る機会が度々あったなあ。」ってことに気づいたのでした。本と23年ぶりの再会でした。あつという間に読み終えた『新しい地歴教育』。大学生だったあの頃、「こんな実践できたらすごいよな。」としみじみ思ったこと、社会科教育だけでなく、生活綴方や日本作文の会に興味を覚えたのも相川実践が

原点であったことを思い出しました。出会った頃のあの衝撃と教育に対する熱い思いを、今回案内人を引き受けたことで思い出しました。それと共に、自分自身を見つめ直すいい機会になりました。……案内人を引き受けて本当によかったと思います。

ところで、著書の中で相川先生はこんな想いを書かれています。

「日本の教師として、日本の子どもを幸福にし、他国に劣らない教育をしたい。」

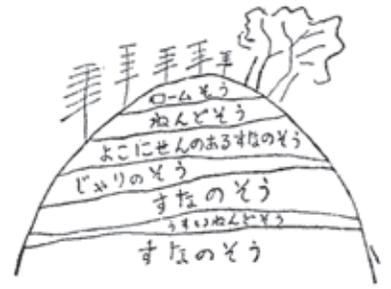
「この仕事は、子どもの精神的発達を考えたところの『可能の追究』であり、少しでも子どもをかしこくしたい。」

「この本で批判検討されることは、日本の子どもたちのためにも、また命をすりへらすようなこの教育という仕事のためにも幸福なこと。……」

毎日の忙しさに押しつぶされそうになっている私には相川先生のような確たる想いがなければ押しつぶされそうになるのだということに気づかされました。教師になった大学時代、教師になったばかりの頃の私自身の教育や子どもに対する想いを思い起こすことができました。そうしたら、なんだか、たとえ忙しくても、ちよつとへっこむぐらいの私になれるようなそんな気がしました。……改めて、この本に再会できて本当によかったと思います。

とうとう『新しい地歴教育』の案内の日がやってきました。研究センターが新しい場所に引っ越していたことが分からないくらいの久々な研究センター訪問でした。久しぶりに会えた春日先生や中森先生や清岡君を前に、なんだか照れくさい感

覚を覚えながら、私なりの『新しい地歴教育』の紹介をしました。



『新しい地歴教育』は1952年度（相川先生は36才）の小学4年生の1年間の教育実践と1953年度の4年生の抜粋した教育実践を書いたもので、実践記録は主に社会科の歴史・地理教育にくわえて、生活綴方や他教科の実践も載せてある本です。

「子どもたちの生活や考え方と教師の思想や能力は相互に反映しあつていくのも事実である。子どもたちの前進と教師の自己改造とは大きな関係がある。」ということで、相川先生のプランのもとに実践された社会科教育や生活綴方、版画教育を通して、子どもたちの社会認識がどう変容していったかが丁寧に紹介されています。そして、子どもたちと共に成長する相川先生の姿も見られます。

相川実践を改めて学んで思ったことは、昔あこがれていた相川実践は、今でも自分がいるとやりたい教育であるということ。でも、実際問題として、やりたい教育がやれない教育になつていくこと。なぜやれないのか……教育現場の現状、今の自分の立場、職場事情、同僚との関係……昔は気にしなくてよかつたことや見えなかつたことが、今は気にすべきことだったり、見えすぎてしまつたりするのもかもしれません。それでも、「やれば

いいっちゃ！ やりたいんだもん！」と思つても、やりたい教育ができない教育になつていくのかもしれない。世の中の変化、自分の力量、精神力、体力の限界（?!）、一昔前とは違う今の子どもたちの環境や内面、職場の多忙化……などなど。冷静に自分の現状を分析することができました。

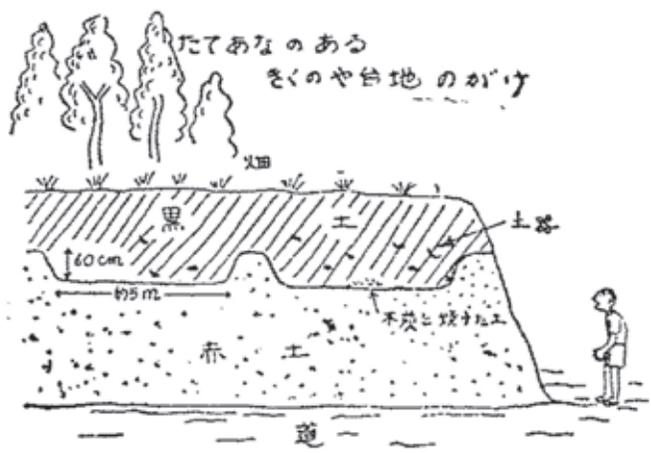
それでも、「過去を知ることは未来を創造する力を育む」ということを今回の案内人ですることので痛感、実感させられました。「はい。やります。」と言つてしまったのは、潜在的にこれまでの学びを振り返つたり、新しい学びを求めていた自分がいたのかもしれない。忙しい毎日の中で、過去の想い、過去の学び、過去の想い出をすっかり記憶の奥底にしまい込んでいた自分。でも、今回の案内人をしたことで、忙しいからこそ、たまにいいから、過去のことを知ること、思い出すことが、自分自身のパワーアップにつながるのだということをしみじみと感じました。

こんな教育がやりたいと思ひ続け、地道に実践や学びを重ねることで、やりたい教育がやれる・できる教育になるのだと思ひます。そのためにも、まず、校内放送のいらぬ校舎だからといって、小さくこそそこそとするのではなく、校舎のはじつこの教室から、学校全体に私らしい風をそよよと送つてみたいと思ひました。職員室から生の声が聞こえる今の学校。とても良い環境なのだと思います。だから、新しい職場で勇気を出して一歩前に進んでいきたいと思ひます。また、未来を創造する力につながる過去の教育実践書をたまたにいいから多くの人と読み合つて、元気をもらおうと今しみじみ思つてるところです。

『戦後教育書を読む会』から数日後、中森先生から

ら心温まるハガキをいただいた。中森先生は大学時代の合研の先生です。4年生で疲れ切つた時、だまつて私の肩をもんでくれた中森先生。（恐れ多くも、あの中森先生に肩をもんでもらつた学生の私……）。卒業した後も、いつも、私の心のこりをほぐしてくれる中森先生。（それなのに、私は中森先生の肩をこらせるようなことばかりしていたなあ。）。中森先生みたいな人間に絶対なるんだと思つていた自分をも思い出すことができました。研究センターは、素敵な人や学びや自分の原点と出会える本場にいい場所だどつくづく思ひました。

（柴田・川崎第二小学校）



報告 フォーラム 「子どもの今と未来を考える」

PART 1

今どきの「友だち」事情

須藤道子

今を生きる子ども達の現実から、子どもが育つということや、子ども達の暮らしや学びを捉え直したいと願って今回のフォーラム開催が決まった。テーマを区切り3回の開催を決め、すぐにも……と意気込んだが、秋は大きな行事が目白押しで日程が取れない。仕方なく3連休の一日、11月23日に第一回のフォーラム「今どきの「友だち」事情」をもった。

それぞれ異なる立場で子どもたちとの日常を持つ4人の方に「話題提供」をお願いしたあと、全体で話し合った。当日、進行役の私は発言をつなぐのに精一杯だったので、この報告をまとめるにあたって改めてテープを回してみた。皆さんの発言は見事に多様で、話題は深まりながらラリーのよう展開されていて、なかなか面白く聞くことができた。

若い皆さんが臆せず自分の考えを表明、他の意見にもしつかり応答しながら対話をリードしてくれたし、ご参加の皆さんもこ

れに縦横に伝えてくださったからだろう。この雰囲気は筆に尽くせないが、話し合いの概要をお伝えしたい。

「話題提供」の皆さんのお話から

◎田名網典子さん（仙台市・児童館職員）
事例2つ。1年生の保護者から「子どもがいじめにあっている。毎日『死ぬ』と言われている」との申し出。そうした言葉が飛び交う環境に育っていない子。言った子は気軽に「死んだら」「死ぬば」と口にしてる。親には謝罪とともに、本人は嫌いでそうした言葉を向けているのではないこと、ここでは免疫をつけて欲しい旨を伝え理解を得る。

男の子が取ってきたミミズを横取りした女の子。育ちの中で花を摘んだり虫を捕まえたりの体験が乏しいのか、返すように促すと握りつぶしてしまうということがあった。その行為を責めずに、ミミズの件はお家の人には秘密にすることを約束した。断

絶というぐらいに親子のコミュニケーションが取れていないことを感じるが、それで友だちとコミュニケーションが取れるのか。

◎佐々木孝子さん（仙台市・中学校教員）
現在3年生担任。男女で友だちとのかかわり合い方は違う。女子は3〜4人とか、4〜5人とかの小さいグループをつくり、その中のメールのやり取り、ありもしない「告げ口」によるトラブルも多い。男の子は遊んでいるつもりで、そのつもりもないのに相手を傷つけている。道徳の時間などに「いじめ」を題材にする。子どもたちみんな「いじめ」をいいとは思っていない。ただ、「いじめ」の認識、特に境界線の部分への認識が違うということは子どもたちも理解したようだ。いじめた側が後で反省しても、いじめた事実やされた子にとつての意味は変わらないということを伝えていきたい。

◎砂金 亜紀子さん（仙台市・保護者）
19才の女の子、中3の男の子の母親。この何年間か携帯のことが気になっている。友だちとのコミュニケーションツールの第一となっていて、すべてメールでのやり取り。家でもかたときも離さない。中学生は部活動で他校の子も含め、とてもだいたい交流の場になつてると



思うし、上下関係や挨拶など社会に出て必要なことも学んでいる。一生懸命やっていると結果も出るし、受験の時などの心の強さにもなると思う。母親は忙しいが子どもからの「合図」を見逃さないよう、子どもとの時間を多く持てるようにできたら良い。

◎煤孫 久子さん(栗原市・養護教員)

体調不良を訴えてくる子の話。今まで仲良くしていた子に避けられている気がする、何も思い当たる原因はないと。最終的には自分で相手にあたり、ちよつとした応答のずれとわかった。自分達で解決する方法を身に付けさせ、大事な時は介入するようにしている。

もう一人、一生懸命友だちの相談にのっている優しくお姉さんタイプの女の子。しかし、自分が困った時に誰にも受けとめられていない。親もこの子に依存的。「無理しなくていいよ」と受け止め、周りの子にも話して力になつてもらつた。

「いじめ」は捉え方いろいろ。家族から愛されていないと、好かれるための人間関係作りに陥る。自分を好きになれない者どうしの「友だち事情」、なかなか難しい。

《全体での話し合いから》

参加者は20数人、うち5名が20歳前後の若い皆さん。

友だちは広く浅く

時間があれば児童館で子ども達の相手をしてきている20歳のA君。「今の子はいいい子になりすぎ、いつも、周りや親に気を使っている。喧嘩しながら育つた自分達の子ども時代と随分変わってしまった。」との指摘。その彼から「本気で付き合う友人は2〜3人でよい。仕事では嫌な人も付き合い合わせなければならない。中高校生から友だちを限定してしまわず、いろんな人とかかわっている」とそれが成長になる。友だちは広く浅くでよい」と、刺激的発言で話し合いが始まった。

今どきの友だち関係は仲間内で分かり合える狭い範囲が主流と思つていたので大いに驚いて聞く。「広く浅く」の意味する感覚は私の世代とは少し違うのかと考えながら聞く。

続いて大学生のB君から「広く浅く」というのは現実的方法としてはあるが、それがベースになりすぎて会話の殆どが建前。自分は広く浅くは苦手。しかし、こういう問題は現代だけではないように思うが、以前と比べそんなに変化したのかを大人に聞きたい。」ときつそくボールが飛んできた。

「本音」の意味が違つてきている

それに応えて、養護教員の煤孫さんの発言「昔は親しき仲にも礼儀あり、今は本音と言つとどんどん踏み込んでいく。それが怖いので表面上の付き合いになる。『本音』

の意味が違つて来ていると思う』『たてまえ』という日本の文化の問題もある。男らしく、女らしく、中学生らしくと縛られ、自分を出して傷つきたくない、嫌われたくないというのがある。今の子ども達は幼い時からゲーム世代。あまり人と会話もしなくて済む。広く浅くの付き合いもありだが、人間関係の持ち方が友達の中で抜けているので、そこから教えていかないと。」

確かに人との距離の取り方の難しさは昔も今も変わらないだろう。だが、「ゲーム世代」のような時代の流れに合わせ、その時代・社会に支配的な価値観がその年齢なりの育ちや経験の中で自然に身につくはずの部分で阻害している面は大きい。それは子ども自身の責任ではないのに「今の子ども達は」と言われるのは若い人たちには心外だろう。もちろん、私達がタイトルにつけた「今どきの」は批判的な意味合いではないのだが。

キャラ付けされる・キャラを演じる

「キャラ」という言葉が使われるようになってどの位になるだろう。「キャラ付けされる、キャラを演じる」というのがある。集団の中で求められる役割、求められているようにふるまうという意味なのだろうか。



関連する発言を追う。

大学生Dさん「自分は頼られキャラ、いじられキャラにされていて、そういう人間関係の殻から抜け出せずにきて高校、大学生になってやっと本当の事を言える友人を持てた。」

大学生B君「自分はキャラ付けの圧力に超然としていた。他人とかかわるのが苦手、広く浅くが好き。他人の目が気にならないので何をいわれても「だから何？」という感じ。」

Kさん（保護者）「息子はキャラ的にはネクラだが、仲間内と携帯でかわす『ライン』の中では違う印象を持たれているらしいこともどう受け取っているのかとまどろ。」

これまでも「いじめ事件」が語られるとき、周りからは「仲良さそうにしていた」とか「楽しそうだった」とか聞こえてくることが多い。程度にもよるが「キャラ」が子ども達の関係の「分かりにくさ」の背景にあることも否定できない。この保護者の方が話した、顔を合わせる生の付き合いと「ライン」の中で見せる顔の違い、本人はどう感じているのだろうか。

「いじめ」って？ 大人は子どもに口だししすぎ？

大学生C君の発言「このフォーラムは『今』に注目しているが、いじめに関しては映画などをみると昔もあったと思うが、今、マスコミなどもここまで大きく取り上げるのは、大人が過剰に反応していないのか。変

わろうとする時期の子どもたちに大人が口出ししている。」

中学校教員のOさん「むかし、暴力といじめを区別していたと思う。殴るとかはあってもけんかとか暴力であって『いじめ』ではない。昔はなかったというつもりはないが、何より違うのは周りの大人が個々バラバラで対応の方法も過干渉か放任か両極端で深刻化していること。」

保護者のKさん「境界線」の話があったが、いじめたり、いじめられたり、自分がいつどちらの側になるのかと今の子どもたちはしんどいかも。」

子どもたちとの付き合いの長いものと教員のTさん、「異なるものを排除しようというのが昔も今もいじめ社会の中で進行している。『みんな違ってみんないい』となっていたら、子どもたちも違った相手から学んでいく。力を合わせて動き出す時、子どもたちもそれぞれの持ち味を出し合っていくのだと思う。」

最後に、大学教員のHさんが『友だち事情』も難しい側面ばかりではないと感じたが、問題をそう簡単にくくれない、分からないというところを大事に考えていきたい。」と、感想を話されて会を閉じた。

話題提供のなかで、「自分を好きになれない者どうしの『友だち事情』はなかなか難しい」という話があった。自分を大切に思うからこそ、相手もそうであろうと思いたい。そういう内発的なところから

出発するモラルとか節度があれば、「いじめ」のように人を追い詰めることはないにちがいない。

《第1回を終えて》

「友達」のテーマを決めてから、私の心にも去来していたのは、井上ひさしが作詞した釜石の小学校校歌の1節、「困ったときは手を出して 友たちの手をしっかりとつかむ 手と手をつないでしっかりと生きる」だった。みんなつないだ手の温かさを知って成長できたらいい。

さて、次回2月2日のテーマは「成績って何だろう」。

今回は20数人の参加でやや寂しい感じでしたが、「デイスカッションの時間が長く非常に楽しかった、人数もこのぐらいが良い」・「また来たい」との若い方達からの感想に励まされている。また、

「学ぶことを突き詰めていけばいじめもなく なっていく気がする。次回が楽しみだ」との感想も頂いた。さらに刺激的な話し合いになりそうな予感がする。どうぞご参加を。

（研究センター事務局）



12月を迎え県内の中学校はどこも、私立・公立高校の志望校を最終的に決める面談が行われている。3年生の子どもも保護者も気ぜわしく、また入試に向けさまざまな思いを抱いていることだろう。入試に向けての現状と思いをきいてみた。

★Aさん（W塾入試担当者）

公立高前期選抜については、「受ける」「受けない」の判断の時点で、受けられない子が思っていたより多かった。昨年までの推薦入試は日頃の成績がよければ、実力はなくても合格する可能性があった。しかし今回の前期選抜は日頃の成績もよくなってはいけなしいし、プラス実力もなくてはいけない。そのようなことが受験するか否かの判断に影響しているのかも。また11月の予備調査では、生徒が自分の評定をはっきりわからないままの段階でなされたところもあるようだ。それを考えると、実際の倍率は下がるように思う。

★Bさん（3年保護者）

この間、私立高と公立前期選抜についての最終的な面談があった。前期選抜については、せっかくチャンスがあるんだから、受けられるならと考えてきた。先生からは、前期選抜についてはなかなか難しいかもしれないということでは言われた。本人もそのことはわかった上で受験すると言っている。それにしても、面談が終わったと思っただけで私立高校と前期選抜の願書を学校に持って行かなくてはならなくて手続きが忙しくて大変だ。中学校には中学校の事情があることはわかるけど、もう少し時間に余裕を持って計画してもらえるとありがたい。

★Cさん（3年保護者）

公立前期選抜については、ここに来て急に《俺は〇〇高校を絶対受ける》とか言い出している。合格したらその高校に行かなくてはならないから、私としてはもう少し落ち着いて考えてほしいと思っているんだけど。まわりのお友達の中には私立の推薦の話なんかも出だしている、本人も何となく早く合格したいというか、そういう焦りもあるんだと思う。

★Dさん（中学校教師）

前期選抜を受けるのは40名ぐらい。11月の予備調査よりも増えている。生徒たちの心理としては、ダメもどでも受けられるならという思いがあるのだろう。3年の先生たちの様子を見ていると、面接や小論の対応で大変そうだ。今までも推薦があったけど、推薦の場合は学校推薦なので人数が絞られていた。でも、前期選抜は条件をクリアーしていればいいので、今年は推薦に比べて前期選抜を受ける人数が増えている。そのための指導というか負担が増えている。また実際、入試書類などの仕事もかさなっている。体調を崩した先生も出ている。

★Eさん（中学校教師）

11月の予備調査では前期選抜受験希望者は30数名だった。最終的な受験者数は減るのではという話もあったが、その後の面談では50数名が受験を希望している。やはり2回チャンスがあるのだから、そのチャンスは生かしたいという気持ちがこのような受験者数増に反映しているように思う。私立高校入試については、「専願」「単願」「スライド合格制」など、入試のあり方が言葉も含めて複雑になっている。子どもや保護者に説明し理解してもらおうのも大変だ。もっと入試をわかりやすいものにしてほしい。

★Fさん（3年保護者）

私は公立の経験しかないのですが、私立の様子を初めて見ました。入試制度以前に高校選抜をするわけです。うちの子供は発達障害があり、入れるところを止めずに通えそうなところ、問題行動に対応してくれるところ、という観点で本人がいいと判断した高校を選びました。前期入試を希望し、落ちたら後期を受けてその高校に入るよう組み立てました。中学校側の説明会では「前期で合格すると後期の受験資格がなくなります」「合格したところに必ず入るという契約をしたことになりました」「出願の仕方にご注意下さい」とのことでした。選択肢が増えたのか減ったのか私にはよくわかりません。娘は学校自体が苦手なので少しでも気持ちの負担が少ないところを選んだようです。サポート校は授業料が高いのでうちの家計では難しいです。

ボクの先生

清岡修

しばらく前から学校の先生も評価される時代になった。一般企業などではすでに評価の時代にあることを考えるなら、遅きに過ぎることなのかもしれない。しかし、そもそも教師の評価とは誰によって、どのような基準でなされるのか。それは適切なのか。そして、そもそも本当にできることなのだろうか。小学校時代に会った一人の担任教師のことを考えると、そんな思いがしてならない。

ボクは、学校がきらいだった。学校、だけでなく、保育所もきらいだった。何がきらいなの？と言われてもうまくは言えない。あの学校の無機質で無表情な佇まいがなんともよそよそしく冷たく感じられた。できることなら休みたいと、いつも思っていた。5つ歳の離れた兄の学校が休みだったりすると、うらやましくてうらやましてくしうがなかった。なんとか自分も学校を休もうと、夜中に寝床から這い出し水道の蛇口をひねり、水

をおなかにべたべたはたきつけた。明日の朝はおなかの具合が悪くなりますようにと、心の中で願った。学校では、なるべく目立たないように努めた。授業中は、特にそうだ。先生と目が合わないようになを向いて息を潜めていた。挙手することはほとんどなかったが、それでも先生に指名された時はあきらめて応えた。3年生の時などは指名されて間違えたと、1回ごとに漢字400字の課題(罰なのか?)が出た。だから1日に2、3度間違えたと増えた。今思うと、なんて理不尽な!と思うが、当時は間違えた自分が悪いのだとまじめに課題をこなした。手なんか挙げると災いが落ちてくると思っていた。通信簿は、たいいてい「授業中はとても静かです。もう少し積極性が……」と書かれた。ときどき「休み時間は元気に遊んでいます……」と、余計な一言が付いた。

そんな学校きらいに異変が起きたのは、

小学5年のことだった。男の先生が、初めて担任になった。M先生は都内の大学を出たばかりのぴかぴかの1年生、しかも後で知ったのだが小学校の免許は持っていないかった。もともとは、中学か高校の体育の先生になることをめざしていたのだろう。だから小学校の、しかも学級担任を引き受けることはM先生にとって大きな冒険だったに違いない。なにしろ突然、小学校の先生として9教科の授業をやりくりしなければならぬのだから。僕らとすこす毎日、先生にとって無我夢中だったろうけど、同時にそれはハチヤメチャの日々でもあった。

たとえば5年の1学期は、宿題もテストも一切なかった。体育教師をめざしていた先生にとつて、宿題やテストは大したことではなかったのかも知れない。そうかと思えば、突然1学期終了目前に「中学校ではテストはまとめてやるんだぞ。知ってるか？」なんて言い出し、何日もテスト漬けの日々が続いたりした。挙句の結果に、実施できずに余ったテストは、ぜんぶ夏休みの宿題プリントになった。楽しい夏休みのはずが、大変な日々に変わった。学級文庫には、図鑑やマジメな本が並ぶ一方、友だちが毎週買ってくる少年ジャンプやサンデーなども平然と並んでいた。

変わったのは、宿題やテストなど学校生活のあり方だけではなく、なによ

り変わったのは、ボク自身だった。授業中も手を挙げるようになった。挙げるといつても、最初は国語の本読みのときだけ。先生に指名されて洪々読んだところが「本読むのうまいな」と言われ、本を読むぐらいなら間違えて恥をかくこともないし、ボクでも大丈夫かと思っただのがきっかけだった。友だちも、そんなボクを応援してくれた。算数の授業では、わからないボク一人のために時間を延長し、みんなが教えてくれた。間違ふことやわからないことが恥ずかしいことでもない、このとき知った。それ以降、先生は授業の節目節目に「清岡、わかるか？ 大丈夫か？」と尋ねた。いつの間にか、次に進んでいかどうかのバロメーター役になっていた。先生は、一生懸命教えてくれた。教えるのがうまかったわけじゃないが、なにしろわからないボク（たち）のために一生懸命だった。ああ、ボクはここにいていいんだ、わからないボクでも先生は認めてくれていて、そのことがうれしかった。初めて学校が楽しくて行きたい場所になった。将来、先生になるのもいいなと思っただけのことだった。

それからしばらくして、教師をめざし大学に入った後のことだった。M先生について母親と話をしていた時に、ぼつりと母親がもらした。「あなたにとってはとてもいい先生だったと思うけど、親たち

の間ではいろいろな意見や声があったのよ。学校が好きになったあなたの姿を見ていたから、お母さんは何も言わなかったけど」と。母親たちの間でそんなことがあったとは知らなかった、思ってもいなかった。誰もがM先生をすばらしいと思っている、そう思っていた。でも、事

実は違ったのだ。でも、はっきりしていることが一つある。それは、M先生が自分にとつてかけがえのない存在だったということ。
評価の時代のなかで、大切な何かが失われていく気がしてならない。
(研究センター所員)

ご案内

宮城民教連「冬の学習会」 13年1月5日・6日 仙台・茂庭荘
みやぎ教育文化研究センター担当講座

講座1 5日13時～14時30分

戦後教育実践書「村の一年生」（土田茂範著・1955年刊）を読む
案内人 加藤奈々さん

著者土田さんが25才で初めて1年生を担当した時の4月から3月までをありのままに、正直に、正確に記述している稀有な文体のたいへんおもしろい記録本。39人の生き生きとした子どもたちから毎日新しい発見をしながら考えつづけ、初めて学ぶ子どもをどう導くか、進歩と成長のためのルールをどうしいてやるか、ひとつの生命を大事にしながら全員をどうつないでいくかなどなど、教師はどう子どもと向き合うべきかを考えさせてくれる。

講座の進め方は、教師経験4年目の加藤さんにあらかじめ読んでおいてもらい、初めに自由な感想を出してもらい、著書の何力所かを参加者で読みしゃべり合おうというもの。（読み合う個所のプリントはセンターで用意する）。

講座2 5日14時40分～16時10分

戦後教育実践書「新しい地歴教育」（相川日出雄著・1954年刊）を読む
案内人 春日辰夫

著者は「主として社会科の歴史・地理教育の実践記録であるが、作文や他教科の教育実践も書いた」と言い、クラスの子どもの祖父のひとりには、「村はずれの、道端の、もう、字も読めなくなっている墓石など、何も教えてくれそうもないものから、君たちは実に多くのことを学びとっています」と書いている。この著書は、教師の側からの実践を報告するというよりも、子どもたちの綴方を通して多くの学びを浮き出させ、学びとは何か、何をこそ学ぶ材料とすべきかを教師に提案していると言える。

講座の進め方は「1」と同じ。

『東日本大震災』

教職員が語る子ども・いのち・未来』を多くの人に

瀬成田 実

「まとまっていなところがいー」

ある研究者がこの本のことを語った言葉だ。

言われてみればそのとおりかも知れない。一人ひとりの文章の長短も視点もまちまち。

教職員が、「あの日」のできごとやその後の避難所運営、学校再開までの苦勞を思い思いに自分の言葉で綴っている。そこには、命がけの避難劇やみんなど支えあつた一晩のできごと、夫や同僚、友人、教え子を亡くした悲しみ、県教委の非情なまでの人事への怒り、そして子どもたちと向き合つて実践してきたとりくみなどが余す所なく切々と語られている……

研究者は「まとまっていな」という言葉でこの本を「評価」してくれた。執筆したのはOBも含めた教職員65名。教員だけでなく、事務職員、栄養教職員、養護教諭も自分たちが担つたことや教訓を綴つた。

この本は、帯にもあるように「過酷な体験と深い悲しみを乗り越え、子どもに寄り添い教育現場の再生に取り組み教職員たちの熱くひたむきな思い」を県内外の人々に語り伝えたいという思いで発行したものだ。

宮城県の教職員は、子どもや地域住民の命を守るために、粉骨砕身、奮闘した。

どんなに短い手記であっても必ず一つの「教訓」は含まれている。このような震災は二度と起きてほしくないが、今後も発生したら、私たちの経験と教訓をぜひとも生かしてほしい。そう願つてやまない。

ある方からは「分厚いので読むのは容易でないけれど、毎晩、一人分ずつ読んで、涙を流しています」という感想もいただいた。

うれしいことに、12月に重版となった。さらに多くの方々に読んでいただきたい。

(宮城組書記長)



宮城県教職員組合編

明石書店 発行

定価(本体)2200円+税

【申込先】宮城県教職員組合

〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45

センターの動き

9月 28日 事務局会議。フォーラム3回もつと決める。つうしん68号届く。

29日 戦後教育実践書を読む会の第2回「新しい地歴教育」。案内人は川崎二小の石田裕子さん。

10月 1日 通信68号発送作業。

2日 清岡さん、朝、県教委の佐々木さんに通信を届けてくる。

4日 コピー機入る。

10日 朝、防災訓練。

11日 69号の企画素案づく

12日 宮教組の「東日本大震災 教職員が語る 子ども・いのち・未来」

12日 明石書店より出版。

15日 事務局会議。教弘済の高橋さんから助成金をいただく。

10日 10時から東北大での打ち合わせ例会。今後の被災地聞き取りについてが主になる。午後

16日 ヤスバーズ読書会

17日 大村茂一さん

19日 通信用インタビューをお願いし、快諾を得る。

20日 鳴瀬二中の学

24日 校長の話を書く。

19日 戸倉小の職員

12日に決まる。

20日 教育のつどい

11月 実行委員会。1時

24日 半から、つどい

11月 企画「大阪の教

育条例と大津い

えてくる事件から

16日 みるみる

24日 1時半から大

村茂一さんのイン

タビュー。主題の

教育委員会のこと以外に、長年力を入れてきた冒険遊び場の話もたいへんおもしろかった。へ保さん来室。

25日 札幌の小川基さん

26日 事務局会議。民教連

29日 冬の学習会に研究セン

29日 武庫川の田中さんか

2日 電話。石巻の調査日程

1日 電話。石巻の調査日程

2日 電話。石巻の調査日程

3日 電話。石巻の調査日程

4日 電話。石巻の調査日程

5日 電話。石巻の調査日程

6日 電話。石巻の調査日程

7日 電話。石巻の調査日程

8日 電話。石巻の調査日程

9日 電話。石巻の調査日程

10日 電話。石巻の調査日程

11日 電話。石巻の調査日程

12日 電話。石巻の調査日程

13日 電話。石巻の調査日程

19日 高校生公開授業への申し込み第1号入る。

21日 清岡さん、東北大

23日 電話。学生の上映会に行

26日 電話。学生の上映会に行

28日 電話。学生の上映会に行

30日 電話。学生の上映会に行

11月 3日 中森さんと運営委員

5日 高校生募集の個人宛

6日 今日も高校生募集依

7日 今日も高校生募集依

8日 今日も高校生募集依

9日 今日も高校生募集依

10日 今日も高校生募集依

11日 今日も高校生募集依

12日 今日も高校生募集依

13日 今日も高校生募集依

14日 今日も高校生募集依

15日 今日も高校生募集依

16日 今日も高校生募集依